

後宮の調達人

弥生 Yayoi



アルファポリス文庫

プロローグ

宮殿の奥、皇帝にしか入ることを許されていない場所があった。

皇帝の妃たちが住まう美しい花園、後宮。

尊き血の姫君、絶世の美姫、賢く聡明な姫君。

美しい花で整えられた庭園のごとく、後宮では多くの妃たちが皇帝のために咲き誇る。金銀宝珠が煌めく装飾に、遠い海の彼方から取り寄せた英知の詰まった書簡、誰もが口にしたことのない美食ですら、望めば妃たちにもたらされる。

ただ、ひとつだけ、妃たちに課せられた制約があるとすれば。

——一度後宮に入れば、二度と外には出ることができない。

美しい鳥籠のような終の棲家で、妃たちは皇帝ただ一人の寵愛を切望し、その美しさを競い合う。

外に出ることが叶わない妃たちは希う。

懐かしき故郷の想い出を。心残りの逸品を。あるいは他の妃より優位に立つための道具を。

愛憎渦巻く後宮で、妃たちの望む品を届ける『調達人』と呼ばれる者がいた。ときに人の望みを叶え、ときに人の闇に触れ。

善き調達人とは、善く聴く耳を持ち、善く観る目を持ち、善く沈黙する口を持つ。妃たちが望むのなら、どんなものであっても、必ず調達人は送り届ける。

その先になにが待ち構えていたとしても。

第一章 調達人、神獣ハクタクを黄妃に献上する。

「調達人、妾はハクタクを飼いたい。他の妃の話によると、お前はなんでも調達できるのだという。ならば妾の望むものを持ってまいれ。そなたならばできるだろう？」

伏せた顔がピシリと固まる。

まだ後宮に入内したばかりの可憐な妃の要求に、んな無茶な……と声を上げそうになったが、ぐっと堪えた。

黄妃の年の頃は十代半ば。実際に嫁ぐには若すぎるが、入内するにはちょうどいい年齢だろう。

若い妃はここで女官や高位の妃から教えを受けて、後宮での振る舞いを身につけていく。

調達人である私——紅姑娘は、直属の上司である後宮の管理者から、顔合わせがてら黄妃に任用があるかどうか聞いてこいと言われて黄妃宮に来たけれど……思った以上の難題を吹っかけられて、少々戸惑う。

高貴なる方の御前で、深く拝礼したままそつと口を開いた。

「黄妃様、ひとつお伺いしたいことがあります。発言をお許しただけますでしょうか」

「許す。面も上げていいぞ」

許可が出たので顔を上げる。

黄妃は少しふつくらとした可愛らしい顔立ちで、目元には朱が入っており、あどけなさや大人びた化粧で隠している様子だった。

着ているのは、黄色の上質な絹織物。花に蝶が戯れる見事な刺繍が施されている。高く結い上げた髪には金の簪がさされ、耳には簡素な宝石の耳飾りが揺れていた。

「ありがとうございます。黄妃様、ハクタクとは……浅学で恐縮なのですが、人の言葉を理解し、万物の知識に精通するとされておられる神獣……いえ、瑞獣の白沢のことでお間違いないでしょうか」

瑞獣となれば吉兆の証となるありがたい獣だ。

……本当に存在していれば。

「うむ。妾によく懐き、妾のことを深く理解するハクタクを愛玩用の動物として飼いたいと思っておる。金は惜しまぬ。用意してまいれ」

いやいやいや、白沢なんて伝承上の生物、そんなすぐに用意できるはずがない。まずそれって実際に生息しているの!? つてところから始まるのでは……

黄妃の表情を窺うが、こちらを困らせてやろうなんて意地悪な色は見受けられなかった。

それよりもつと切実で真剣みを帯びているような……

冗談で言っているわけではないらしい。

うーむと心の中で唸る。なかなか厄介な依頼だ。

けれども、後宮の調達人に否という言葉は存在しない。

「ご依頼承りました」

にこつと笑みを作る。

「あなた様が望むハクタクを、お届けいたします」

私は黄妃に深く一礼した。



新しく入内した主のために整えられた美しい黄妃宮を出ると、そのまま朱妃宮へと向

かう。

今日の目的は黄妃への面通りと朱妃への御用聞き。

必要な品を調達して渡すだけならば、管理者や女官を通せばいい。

だが、妃たちが心の底から望むものを最上の形でお渡しするのが調達人の責務。少々面倒だが、直接希望を聞き、手配して届ける必要がある。

そのため、調達人である私は月に何度か妃たちの宮殿を訪ね、御用聞きをおこなっている。

背が低く足も遅い私は、転ばないように気を付けながらとてとてと後宮の庭を通っていく。

後宮は宮殿の一角にあるとはいえ、幾人もの妃たちにそれぞれ宮を与えられるほど広い。そのため、移動は少々骨が折れる。

今から向かう朱妃宮は、今の皇帝の一番古い妃の宮だ。

朱妃は長く皇帝に仕える宰相の家の娘で、女兒とはいえずでに皇帝の子を産んでいるために、数多い妃の中では一番位が高い。

入内する妃たちの管理も朱妃がおこなっていると聞かれている。

朱妃宮にたどり着くと、顔なじみの女官に朱妃への面会を願う出る。

元々訪れる予定だったので、許可はそれほど時間をかけずに下りた。

「朱妃様、調達人にございます。御用を承りに来ました」

深く拝礼すると、パチンと扇を閉じる音がした。

「紅姑娘、よくぞ参った」

面を上げよと言われ、会話の許可が出る。

朱妃は凛とした、美しい妃だ。迫力のある美女で、作法には大変厳しい。

通された場所には茶席が設けられていた。芳しい香りの茶を年若い女官たちが淹れてくれる。

朱妃のために用意されたお茶は一級品。だが、妃に出されたお茶と自分に出されたお茶の色が明らかに異なる。

何番煎じかしら。まあ、調達人に出すお茶なんてそんなものよね。

部屋の隅で口元を袖で押さえ、くすくすと笑う二人の女官の姿が視界の端に入る。気付かないふりをして茶器に手をつけようとしたが、朱妃がそれを止めた。

「そこのお前。お前は私の客人にそのような茶を出すのか？」

朱妃は、年若い女官たちを厳しく非難した。

女官たちは青ざめて地に伏せる。

「い、いえそのようなことは!!」

「申し訳ございません!!」

「それとも、たかが商人の御用聞きと侮ったか」

あー、おそらくこの若い女官たちは、私のような調達人風情には出廻らしの茶で十分と思つたのだろう。

「ここは皇帝の花園。この後宮において、立ち振る舞いは完璧を求められる。それは女官として同じこと。お前がおこなつたことは私の品格を下げることに他ならない! お前は私を『客人を侮る妃』と称させるつもりか!」

「いいえ! け、決してそのようなことは! ですが朱妃様、このような商人風情など……」

「この後宮において、お前たちに客の優劣を判断する権限があるというのか? 自分の判断で商人や宦官を侮辱し、生家が細い妃や位の低い女官をそのように扱うのか。皇帝陛下の渡りがあればそんな価値などすぐに覆る。お前たちの浅はかな行為によつて、この宮全体が貶められることもあるのだぞ? ええい、女官見習いから出直して参れ!」

「そ、そんな朱妃様!」

「お許しくださいませ!」

見慣れた女官が若い女官たちを引きずっていく。

去り際に、こんな商人風情の小娘のせいで……なんて小声で悪態をつかれたけれど。

いや、確かに背が低くて童顔のせいで年齢よりも下に見られることが多いけど、小娘呼ばわりとはね。

もやもやとしている私に馴染みの女官が新しく用意したのは、丁寧に淹れられた茶と珍しい菓子。

いやあ、私はなにを見せられたのやら。

「容赦せよ。あれは名家の娘たちだそうだな」

お人が悪い。以前にも同じようないざこざがあつたのだろう。お灸を据えるために私を使つたというわけか。……あえて彼女たちが侮るようにと。

朱妃に仕える若い女官は入れ代わりが激しい。

他の宮に比べて要求される仕事の水準が高いのだ。生家で甘やかされていた娘には少々酷なことだろう。

良家の子女が後宮に勤める場合、通常は女官から始まる。それを見習いからやり直すとなれば、水場やご不浄の掃除なども仕事として入ってくる。いつまで続くだろうか。

「許せ。西域より取り寄せた茶菓子だ」

ううむ。出廻らしに気付かないふりをして穩便に済まそうとしたのに、うまく使われてしまったな。

まあ、朱妃の一計ならば仕方がない、と思いつつ、美味しそうなお菓子をばくりと食べる。

「さて、紅姑娘ホンクワンヤン。先に黄妃のもとへ参れと命じてあつたが、そなたの目から見て足りぬものを用立てよ」

「かしこまりました」

やっと本題に入った。

朱妃は大変厳しいが、非常に公平な方だ。黄妃の入内じゆだいにも目を配っているのだろう。

黄妃の衣は質のいい絹で織られていたが、装飾品の飾り石は簡素なものが多かった。

生家は確か酪農などで富を築いた一族だったはずだ。

隣接する地域が絹織物の名産地ゆえ、質のいいものが手に入りやすいのだろう。持参

してきた衣は最高級品が多く、織も素晴らしい。

代わりに、装飾品などは流行り廃りのない無難なものばかり。

用立てるとすれば繊細せんさいな細工の装飾品を幾つかと、しきたりや作法の指南書などの書物関係だろうか。

もちろん娘が後宮じゆだいに入内するとしたら、生家は一族をあげて織物や装飾品を持参させる。

皇帝の目に留まれば、次代の王の母となるのだから。

けれども、生家によって持参できる品の質が変わる。

仕える女官や寝食については後宮で先んじて準備をおこなうことができるが、個人に合わせた品は入内じゆだいしてから調え始めることがほとんどだ。

生家によって不利益が出ないように、足りない部分を調達せよということだろう。

「そなたの見立ては外れたことがない。よきように計らえ」

「ご依頼承りました」

朱妃は作法に厳しい。普段ならば新しく入内じゆだいした黄妃の御用を朱妃より先に伺うなど許されないだろう。

けれども管理者から「黄妃と朱妃のもとに行つて御用聞きをしてこい」と命じられた。

口に出した名前の順番にも意味があると感じたのだ。管理者は頭が切れる男だ。慎重に言葉の裏まで読み解かなければならない。

立ち去る前にひとつ朱妃に尋ねる。

「朱妃様、あなた様の目から見て、黄妃様はどのように映りましたか？」

「そうだな。……少し落ち込んでいるように見えた。黄妃宮の女官からは入内じゆだいして不安そうにしていたと報告を受けている」

なるほど。それがハクタクを飼いたいという希望に繋がるのか。

「朱妃様、かしこまりました。そのご不安もどうかしてみせましょう」

「ああ、期待しているぞ、紅姑娘ホンクウニヤシ」

一礼して御前を辞した。



朱妃宮を辞すとき、微かに赤子の泣き声が聞こえてきた。

朱妃が産んだ皇女の泣き声だろうか。

この後宮では稀に赤子の声が聞こえなくなってしまふ「事故」が起きる。

……このまま何事もなく育つてほしいと祈らずにはいられない。

後宮から宮殿に続く建物に向かう。

そこにいる衛兵の宦官かんがに木板で作られた許可証を渡すと、出入りの記録と照合して戸が開かれた。

後宮の姫君や女官たちに様々な品々を届ける調達人は、管理者から特別な許可証を発行されている。

後宮にはこの建物の渡り廊下を伝って向かう他に、直接後宮に面した正門もあるのだが、そこは特別なときにしか開くことはない。

特別なとき……入内じゆだいする妃を招くときにだけ開かれる。出るときには開かれない。

そのため、食材や物資などは衛兵が見張るこの建物を經由して届けられるのだ。

ととてと歩いてみると、ちょうど近くの扉が開かれた。
黒衣くろいを纏まとう衛兵が、周囲を警戒しながら扉を押さえている。
うげっ。

中から現れたのは、長い黒髪の男。

顔立ちは整っているが、その冷酷そうな目つきがすべてを台無しにしている。

絶世の美丈夫と称される將軍ほどではないにしろ、女性から騒さわがれそうな外見だ。すべてを拒絶するような冷たい目つきがなければ、だけど。

「朱妃が若い女官をやめさせたそうだな」

どこまで耳が早いのか。いや、実際には見習いからの再出発なので、まだやめさせてはいないと思うけど。

おそらく時間の問題。この男の予測通りになるのだろう。帰りがけに上司である後宮の管理者に遭遇するなんて。あー、面倒だ。もう少し遅く後宮を出ればよかった。

男が出てきた部屋はギリギリ宮殿側にあり、管理者に仕事を依頼されるのはもっぱらこの部屋だ。うう、まだそこにいたのか。

廊下に伏して臣下の礼をとる。「見習いに降格となっただけでございます。……後任の女官の選定はいずれおこなわれるとは思いますが」

「そうか」

もう彼の中では女官たちがやめるのは決定事項なのだろう。すでに彼はこのことに興味を失っている。

ふと、黄妃の依頼を思い出す。

管理者はこの宮殿にある貴重書庫の入室権利を持っている。もしかしたら瑞獸についての資料を見たことがあるかもしれない。記憶力に優れている男だ。一読していれば覚えていられるだろう。

ダメ元で聞いてみることにした。

「つかぬことをお伺いしますが……白沢はくたくという瑞獸ずいじゅうについて、なにか文献などで読まれたことがありますでしょうか……？」

おずおずと尋ねると、冷酷な瞳で見下ろされて、こめかみを二度トントンと指で押す仕草をされる。

むぎー！ 「頭は大丈夫か？」という仕草！ やっぱり聞くんじゃないかった！

「意図がわからぬ。些末ちまうなお伽噺かばなしを信じる年でもあるまい」

いや私だつて依頼じゃなかったら聞いてないわよ、そんなこと！

なんてことはおくびにも出さず、いえ、そのちよつと、などと濁して愛想笑いをする。「瑞獸ずいじゅうの発現を望むより先にやるべきことがあるだろう」

もう少し言い方というものがあるんじゃないのかな？！

管理者が裾の長い衣を翻ひるして宮殿のほうへ去っていくのを、深く頭を下げて見送る。去る方向が一緒なのだ。

彼が護衛を連れて視界から消えるのをじつと待った。



調達人として妃たちの御用聞きをおこない、必要とするものを調達するのはやぶさかではない。

人の言葉をよく聞き、東西南北を走り回って必要なものを集めるのは性に合っている。ただひとつ問題があるとすれば、後宮を有する宮殿の敷地が広いということだ。

宮殿を抜けて町まで戻るのに時間がかかる。足の遅い私では、なおのこと遠く感じてしまう。

「籠が欲しい……」

とてとてと宮殿の砂利道を歩いていく。

歩幅が狭いせいで歩いても歩いても距離を稼ぐことができない上に、元来の性質のせいか、急ごうとすれば普通にこける。

籠に乗った貴族が悠々と横を通りすぎていくのを見ると、正直羨ましいと思ってしまう。

あの籠の印、高位貴族の桃家のものかな。

「羨ましい……」

もちろん、皇帝の住まう宮殿内を籠を使って移動できるのは、一握りの者だけだ。

古くから皇族に仕えている者か、やんごとなき血族の者。あとは一代限りの特例で籠の使用許可を得た者。その特例を受けるためには、宮廷内にいる五名の推薦状を得なければならぬ。

どうしてそこまで厳しく制限するかといえば、籠の中に武器や火薬などの危険物を隠して持ち込まれる危険性があるからだ。

以前この距離に耐えかねて管理者に泣きついたときには、冷たい目で一瞥されたものだ。部下の労働環境に厳しすぎるぞ、あの上司。

何年もかけて籠の必要性を説いたお陰で、なんとか推薦状を出してくれたけれど。

私は調達人という仕事を長く続けているので、さらに二人の妃からも推薦状を得ることができた。だけど、あと二名分の推薦状が足らず、籠は願望のまままで止まっている。

推薦状を出す条件も重いんだよなあ。宮殿において『この者の責を負う』って条件だから下級女官などでは出してもらえない。

真面目に働いている私に誰か推薦状くれないかなあ。

仮に籠の許可を得たとしても、管理者の出す条件が厳しすぎて、籠役を引き受けてく

れる者を探すことも頓挫^{とんざ}している。

なんとか宮殿の正門を抜け、町へ通じる関所を抜ける頃には、へとへとになっている。まいった。

町の入り口近くの甘味処で果物を濾^こした飲みものをちびちびと飲みながら、今後の方針を立てる。

揃えるべくは、黄妃から依頼を受けたハクタク（見当つかず）と、朱妃から依頼を受けた黄妃の装飾品や指南書など。

朱妃のほうがすぐに算段がつきそうだ。先に馴染みの装飾品店に向かおう。皇室御用達の装飾品店なので、品質のいいものが揃っている。

また、礼儀作法の指南書は、宮殿と古くから取引のある本屋に伝手^{つて}があるので、何冊か見させてもらえばいいか。

せっかくなので、伝説や伝承関係の本も確認して白沢^{はくたく}についても調べてみることにしよう。

方針が決まればやるべきことが見えてくる。

甘い果実水を飲み干して、私は店を出て装飾品店に向かった。



装飾品店は町の中枢にあり、護衛を店の内外に配置している大きな店だ。

後宮の出入り業者として認可されている店なので、時折、店主の後妻の一人がとっておきの品を後宮に持つてくる。

その際に私が目利きして買い取ることもあるので、ある程度気心の知れた仲だった。

入り口で馴染み客の証^{あかし}として渡されている札を見せると、中に通された。

さすがにこの都で一番大きな装飾品店だ。品揃えが違う。

目移りするほどたくさんさんの装飾品の中から、黄妃に似合いそうなものを幾つか見繕^{みつくろ}う。ただ、金細工の簪^{かんざし}はよさそうなのが見つけれなかったので、有名な工房のものを二、三点取り寄せてもらうことにした。

次に向かうのは本屋。装飾品店から歩いて向かうとかなり時間がかかるので、大きな通りに出て籠を拾うことにした。

この時間帯だと籠屋はあまり巡回していないから、少し捕まえるのに苦戦するな。

籠が通るまでの時間潰しに路地裏を覗けば、物乞いの孤児や修行僧がいたので余った小銭を小籠に落としていく。修行僧がリンと綺麗な音の鈴を鳴らした。

三度ほど籠が通りすぎていったあと、ようやく一台の籠が止まる。

……確かに見くびられるかもしれない外見をしているけれど、すぐに捕まらないのは辛い。

同じように籠を待っている男性がいると、そちらのほうがきちんと金を落とすとうだと判断されて、優先されてしまうのだ。

ようやく捕まえた籠に乗り、行き先を伝えると、籠引きの屈強な男二人は滑らかに走り出した。

四半刻(三十分)もしないうちに本屋についたので、懐から金子を取り出して支払う。おまけなのかわからないけれど、練り飴あめをもらってしまった。この見た目だからだろうか。ううむ。

幽玄書店と看板に書かれた店に入る。

「店主、久しぶり」

この本屋は古ぼけていて廃屋のような外観だけれど、中は書物類が傷まないような工夫がされている。

写本を作っていたのだろう初老の男性が、目を細めてこちらを見てくる。

「なんじゃ、紅ベニか」

私だと認識したとたん、店主は興味を失ったように仕事に戻った。

昔——今ほど商品の目利きがうまくできなかつた頃、金子が足りなくてここで写本を作る仕事をもらっていた。その頃からの付き合いなので、わりと今でも融通ゆずりはきく。

黄妃向けの指南書がないかと尋ねると、面倒そうな顔をしたが複数用意してくれた。

後宮での作法の本とかは、昔は後宮内で写本を作っていたけれど、女官の入れ替わりが激しくて手が回らなくなったのか、今ではこうした店でおこなっている。

廃屋にしか見えないこの本屋は初見の客には厳しいが、その分馴染みの客への忠義は篤い。

「これとこれ……この二冊の教本があればよさそうね」

「こちらの本はいいのか」

「その部分の礼儀作法は生家で身につけていらつしやるみたいだから。宴うたげでの作法などが載っているこちらの教本で十分だわ」

ふーん、と興味なさそうに呟きながらも、店主は濃い茶を出してくれた。

この店主が茶を出すのは、長居していけという合図だ。普段のそっけなさから考えると珍しい。

本の虫である店主は茶を淹いれる時間すら勿体ないと活字もったいに向かうものだから、いつも

茶は煮出しすぎて渋くなっている。

苦さにぎゅむっと目を瞑りながら、最近入った本などについて聞く。

「え、東域から流れてきた木簡、入手できたの!? 経路が限られていてものごく入手困難だって聞いたけれど」

「等価交換。こちらは『義獣忌憚』を手放すことになった」

渋い茶以上に渋い顔を見る限り、手放したのは写本ではなく原本だろう。けれども、それだけの価値があるから店主は手放したのだ。

「ねえ、折り入ってお願いがあるのだけれど、瑞獣……特に白沢について載っている写本はないかしら。どんな小さな記事でもいいわ。図鑑の一部でも構わない。郷土信仰や正確性のないお伽草子でも構わないから」

店主はちらりと私を見て対価を要求する。

「極小経典の写本作成」

うげ、豆粒ほどの大きさの経典の写本は骨が折れる。

「それと新しく入った本の目録作成で手を打とう」

本がどっさり入った木の箱をぼんぼんと叩いた。

ひえっ、木箱三段くらい積み重なってない？

「うぐぐ、条件を呑むわ。ただし、該当箇所のみ複写許可。これは譲らないわよ」

店主がニヤリと笑い、交渉成立だと言わんばかりに渋い茶のおかわりを差し出してきたけれど、私はそっと遠慮した。



「いや、やっぱり白沢はくたくって架空の生物だよね!」

あれから数刻。まずはじめに新しい本の山を種類ごとに分けて整理し、目録の作成。

それからちよっとだけ休憩したあと、写本を一刻ほど。いやあ、持つべきは速記術! なんて思いつつも目をしょぼしょぼさせて写本を作成した。

その後は、店主が書棚の中から出してきた伝承や伝記などの書物の山から、瑞獣ずいじゆうや妖怪などの記述をとにかく探しては書き記し、他にも載っていないような文献がないかと目星をつけていく。

白沢はくたくは牛のような外見をしていて、額に第三の目がある。そして人の言葉を理解し発するという稀まれなる神獣……とされている。

地域信仰の一種かと思つて各地方の文献を紐解いても、お伽お伽漸しん以上の記載はない。

書いてあるのは、白沢はくたくが現れるのは、安定した治世ちせいがなされる吉兆きせうの印いんとだけ。

突然変異の種から転じた眞話まことかと思ひ、似たような獣の目撃例などの文献を漁ったが、日の光に弱い白い獣の話はあつても、人の言葉を理解する特徴は持ち合わせていないことがほとんどで……

白い毛並みの動物は神の御使いとして保護する地方の話も出てきたけれど、検証するには情報が足りない。

「なんじゃ、紅かざ。お主、まだそんなお伽噺えんばなしを信じておったのか？」

「ぐぬぬ……こういつた伝承の大本にはなにか由来となる事象が隠されていることが多
いから、それを期待していただけよ」

ほふりと後ろに倒れ込む。うすうす予想はしていたが、神獣のような存在が実際にい
ることなんてそうそうあることじゃない。

ずっと細かな字を追って目が疲れたので、目頭をぐにぐにと揉む。

一旦、情報を整理しよう。

ひとつ、黄妃はハクタクを愛玩動物として飼いたいと言っている。その際には金は惜
しまないという破格の条件を出している。

ふたつ、「妾わらわによく懐き、妾わらわのことを深く理解するハクタク」という指定が入ってい

る。人によく懐くのではなく、黄妃わうひに懐く瑞獣ずいじゆうという指定。

三つ、他の妃の話から、調達人はなんでも調達できるといふ情報を得ていた。黄妃も
調達人ならば入手できると思つた……？

「そうだ、黄妃はそんなにも珍しい条件のハクタクなのに、入手できないとは微塵みじんも
思つていなかった」

四つ、その条件を課してきた黄妃は、冗談を言つたり困らせてやろうなんて声色はし
ていなかった。むしろその眼差しはさすがるようである……

そのハクタクは瑞獣ずいじゆうで間違いないですか？ の問いに「うむ」と答えた黄妃。
「是せとも取れるけど、ただの相づちなのだとしたら、前提が崩れるな……」

もしかして「瑞獣ずいじゆうのハクタク」という言葉に私は必要以上に踊らされていた？

もっと簡単なことなのでは……？

倒れた身体を起こそうとしてじたばたと不器用に動き、なんとか机に向き合つて複写
した紙をまとめる。

下調べした文献は幾つもある。それが役立たなかつたのは悔しいが、調べたこと自体
は無駄にはならない。

物事は関連性があることを証明するより、関連性がないことを証明するほうが難しい

のだ。

名前に踊らされ、難しく考えすぎてしまった。

もつと単純なことだったのだ。

複写した紙を用紙入れに仕舞い、店主に声をかける。

「紅、用事は済んだのか？」

「ええ、すべきことがわかったわ」

「ほう？」

ぐぬぬっと大きく伸びをして、黄妃に渡す予定の指南書をばらばらとめくる。

そこには、入内の際に後宮へ持ち込めるものの規定が細かく記されていた。

生家に仕えていた女官、衣や宝石などの装飾品、嗜好品も毒性がないかを確認したあとなら持ち込みは可。

その他の愛玩動物は猫や鳥などの小動物はよくて、犬は不可。噛み殺すための道具として調教ができるからという理由で、狩猟犬だけでなく小型の犬も基本的には許されないらしい。

大型の動物では、特例で馬だけは許可が出ている。生家から馬車を牽いてきた馬も入内時なら可。

何代か前の妃に馬を育てる趣味があり、後宮内に馬の宿舎を作ったって話だものね。

逆に言えば、それ以外の動物は入内の際に持ち込みは許可されない。

だからもし……入内後、なんらかの動物を後宮内で飼うというのなら、一度調達人に届けてもらう必要がある。つまり調達品という形でなら許されるのだ。

「黄妃の生家は、酪農などが盛んな地域の豪商だったわね。自然と動物と触れ合う機会が他よりも多いのかも。ええと、確か黄妃の生家は甲州よね。そこなら馬車を使えば遠くないはずだわ」

私がしなければならなかったのは、黄妃の生家におもむき、ハクタクという名の黄妃の愛玩動物を探すこと。

ハクタクというのは生きものの種別じゃなくて、名前だったのだ。

黄妃は最初から瑞獸なんて伝説上の生物なんて探していなかった。

遠回りをしてしまつて恥ずかしい。

ぺちんと頬を叩く。いや、瑞獸ではなかったと判断する必要はあった。だから先に文献を当たるのは定石だ。

やっと調達人としてすべきことが見えてきた。



本屋から出ると、日はすっかり落ちていた。

夜に女性が一人で出歩くのは危険だ。近くの店で夕食を食べたあと、その店で籠を呼んでもらいい、家に帰った。

翌日、遠出の支度をして町の外へ出るための馬車乗り場へ向かう。

黄妃の生家がある地域は、距離的にはそこまで離れていない。今乗り込んだ馬車で一刻（二時間）ほどといったところだろう。

できれば日帰りで帰りたいなと思いつながら馬車に揺られ、昨日調べあげたことを整理する。

ハクタクが元々黄妃の飼っていた愛玩動物だと仮定するのなら、その特徴を推測できる。第一条件として黄妃にとっても懐いていて、賢い動物だろう。

さらに入内時の受け入れが許可されていない動物ということを加味すれば、ある程度狭められる。

まずは私が後宮に出入りする商人ということを生家に信じてもらうのが先だな。

ガコンツとたまに石に車輪が乗り上げる衝撃に身体を揺らしながらそんなことを考えた。

しばらくすると、麦畑が一面を覆う、のどかな風景が広がる。

皇族の住まう宮殿とその城下街は人の往来が盛んで、物流の中心でもあるので賑わいを見せているが、少し町から外れるだけでこんなにも牧歌的な景色に変わってしまう。

町の喧騒が私は好きだ。そこに人の営みがあるから、見ているだけでも楽しい。

……けれどもたまにはこういった風景も悪くない。

「まあ、馬車に揺られると身体の節々が痛いけれど」

しばらくすると、甲州の都に入った。

黄妃の生家はひと目でわかるほどの豪邸だった。

私みたいな若い女の外見ではどれだけ衣を整えていても門前払いだろう。屋敷の門番に後宮の管理者から渡された許可証を見せ、後宮と取引のある商人の奉公人として、主人に代わりお目通しを願いたいと託けを頼む。

女が私が調達人と言っても信じてもらえないか、軽んじられるだけだ。

なので虎の威を借る狐ではないのだが、使えるものはなんでも使う。

最初門番はその許可証を不審げに見ていたけれど、なんとか上の人に話をしてもらう

ことができた。家令に確認をとって、本物だと理解してもらえたようだ。

その家令の指示で客間に案内された。

出てきたのは質のいい茶に、牛の乳を発酵して作られた甘味。この地域で作られる乳製品は皇室に献上されるものも多い。

しかもこの甘味は長期保存に適していないため、ここでしか食べられない限定品。うぐぐ、やるな家令。私を軽んじることなくもてなしてくれることに好感を持つ。

「よぐぞ都からおいでくださいました。あなたの主は後宮へ品々を納品される商人とおっしゃいましたか」

客間に現れたのは、背筋がピシリと伸びた老齢の家令だった。

「はい、奉公人の紅姑娘と申します」

「後宮……ということは、妃様にもお目通しを……?」

「後宮への納品は、私が主人の代わりにおこなっております」

「おお、そうでしたか。後宮に直接……それでは、黄妃様にもお会いになられましたか? 黄妃様のご様子はいかがでしたでしょうか。入内して一月ほど経ちましたが、なにかご不便など……」

黄妃と面通りでできる立場だと伝えると、相手の態度が軟化した。

入内してしまえば、いくら家族とはいえ会うことはできない。

黄妃は両親や使用人に愛されて育ったのだろう。黄妃の様子を伝えると、家令は嬉しそうに目尻の皺を深める。

しばらく後宮での話をしたあと、家令がおずおずと尋ねてくる。

「紅様に品々をお預けすれば、黄妃様にお渡しいただけるのでしょうか」

「こちらで一度検品をさせていただきますが必要ですが、承りたいと思います。もちろん、手紙などもお渡しすることは可能です」

「ああ、それはすぐ当主に伝えなければ! 後宮へ品々をお送りしても関所などで時間がかかりますからね。本家の姫様……いえ、黄妃様に足りないものはないか、身体を壊してはいないかと皆で心配していたのです」

今ならハクタクのことを聞くことができるかもしれない。そう思い、家令を探りを入れることにした。

「入内してから黄妃様は少々寂しい思いをしているかもしれないと他の妃様が心配しておられました。生家から届けられたものがあれば、とても喜ばれるでしょう。なにか心の慰めとなるようなものはございますでしょうか。……たとえば、黄妃様が以前大切に育てていらつした草花や愛玩動物など」

家令は少し思い出すように顎に手をかけた。

「そうですね、あの方は草木を愛でるよりも、牛や羊などの世話をするのがお好きな方でしたから……確かに入内じゅだいの際に規定の動物以外は連れてはいけぬと知り、少々落ち込んでいらっしやいましたね。なにか可愛がることができる動物があれば慰めなぐさともなりましようが……」

「もし可能でしたら、黄妃様が可愛がつっていた動物を見せてもらうことはできますか？ 入内の際に後宮に持ち込むことは難しくても、私どもを通して調達したものであれば、黄妃様にお届けできる可能性がございますので」

生家から届けるにしても生きた家畜類は許可が下りない可能性が高い。

だが、調達人を介してならば……彼女が可愛がつっていた動物を後宮へ運ぶことができるともかもしれない。

「ええ、もちろんでございます。是非黄妃様をお慰めなぐさする動物を連れていってください」

「あの、黄妃様が名前を付けていた動物はおりますか？ たとえば、ハクタク……なんて名前を」

「ハクタク……ですか？ その、正直に申しますと、大旦那様は黄妃様をそれはそれは大切に、皇帝の妃に相応ふさわしくあるようご教育しておりました。そのため黄妃様も、大旦那様には秘密で動物の世話をしています……」

家令たちは大旦那の手前、見ぬふりをしていたわけか。

「大旦那様の一族は酪農によって富を築いてきました。農地を大切に、畜産動物にも情を注いできたという経緯けいゐがございます。それゆえ、この屋敷の一角でも珍しい家畜を飼っておいでです。黄妃様が餌付けえづけしてらっしゃったのもそこで間違いありません。」

家令は一礼すると部屋を出ていった。案内を呼ぶついでに大旦那に子細を説明しに行つたのだろう。

少し待っていると、部屋の外から声をかけられる。黄妃の世話係だったという女性だ。黄妃の入内じゅだいに付き添うには年嵩としかまだから屋敷に残つたのだろう。穏和で優しくその女中が、家畜を飼っている厩舎うまやに案内してくれるという。

大きな屋敷の広い庭を歩いていくと、やがて畜産を生業なりわいにしている家特有の臭いが微かにしてきた。

「貴族の屋敷なのに珍しいでしょうか？ 黄家では屋敷の一角で酪農の研究をしているのですよ。甲州の農場で何か異変があれば、すぐに黄家お抱えの家畜医が飛んでいって、事態の収拾に尽力するのです。ふふ、そうやって民の生活を守っているからこそ、飢饉ききん

や災害などが起きてもすぐに再建ができるのですよ」

確かに、どの地域でも天候や災害によって浮き沈みがあるけれど、この地域の記録ではそこまで大きな被害はない。

それも治める者の力量というわけか。

「うちの姫様もその血を継いでいるのか、本当に動物がお好きでしてね、大旦那様が注意してもすぐに舌を出して餌をやりに行ってしまうわねえ」

目を細めて黄妃のことを語る女中は優しげで、どれだけ彼女が愛されていたのかがわかる。

「あの、ハクタクと名付けていた動物に覚えはありますか？」

「ハクタク……？　姫様はハク、ハクと白い毛並みの動物に話しかけていたので、それかしら……」

「白い毛並み！　それこそ黄妃様が望んでいらっしやる愛玩動物かもしれません！」

確かこの地域の牛や羊は、茶毛か黒毛のものが多かったはずだ。

珍しい白い毛並みというのもハクタクの伝承に合っているので、そう名付けたのだろう。

あとはその動物を都に連れて帰れば依頼が終わるぞ、と喜んで女中の案内する厩舎に

向かえば、そこには……

「白い動物が……いっぱい」

その厩舎には牛や羊、犬から少々物珍しい猪いのちなど様々な白い動物が寄せ集められていた。

「姫様がハクと呼んでいたのはこの中のどれかだと思っただけですが、大旦那様に叱られないように、わたくしどもあまり見ないようにしておりますので、どの子がそうかと……」

「白い毛並み……よ、よくぞここまで集めたわね……」

牛や羊なども全て白色。中には目が赤いものもある。しかも牛や馬、それぞれの動物が一頭や二頭ではなく複数頭存在している。ひえっ。

「それがその、この地域ですと、白色の動物は神の御使いとして殺してはならないことになっていてんです。ですが、そうなると村の中では養いきれないと山に還かえしてしまう者もいます……そこで代々当主が白色の動物が生まれるとこうして保護しているわけなんです。そのうち数や種類が際限なく増えて……」

ぶもううと白い牛が鳴き、羊がそれに対抗するようにめええと呼応し、わふわふつと白い犬がこちらに近寄ってきて撫でて撫でて尻尾を振り目を輝かせる。

なるほど、なるほど。この中のどれかが……黄妃の言っていたハクタク。「いや、もう少し詳しく教えてよ……」
べえべえと鳴く白色の動物たちに囲まれて、私は途方に暮れた。



さて、どうにか黄妃の生家でハクタクを見つけることができた私は、都に戻るにあたってたくさんの手土産てみやげを持たされた。

ついでに帰りの馬車まで手配されて、至れり尽くせりだ。

用意されたのは家畜の運搬などもできる大きな木製の二頭牽びきの馬車だったので、荷台で白い獣と一緒に過ごすことになったが、まあ仕方あるまい。

他にも黄妃に届けてほしいと言われた絹織物や茶、嗜好品などが山ほど載せられている。

おまけにいつの間にか書いたのだろうと思うほどに分厚い、両親からの手紙も手渡された。

一応念のために品々を検品したが、問題はないように思われた。

黄家の人たちに盛大に見送られ、甲州を出立する。

数刻馬車に揺られ、ハクタクと一緒に都にある自宅の前で降ろしてもらう。

御者は馬車に黄妃への贈り物を載せたまま、都の宿に泊まるらしい。御者はハクタクの世話もしようかと言ってくれたが、手入れをしないで断った。

生きものを後宮へ届けるためには準備が必要だ。念入りに身体を清め、一晚丹精を込めて世話をする。

次の日の朝、迎えに来てくれた馬車と共に宮殿に向かったが、門番に呼び止められた。「調達人のお嬢ちゃん、籠や馬車の中に入れる許可証は持っているか？」

「……持っていないです」

ぐぬぬ、これだけの荷を抱えているのに、やはりここで止められてしまうのか！

宮殿内に入れないので、乗ってきた馬車からハクタクや荷を下ろしてもらう。

黄妃宛の荷がほとんどだけれど、とにかく量が多い。門番に手伝わってもらって載せられるだけハクタクの背に荷をくくりつける。

少し抗議するような瞳を向けてきたものの、ハクタクはおとなしくしていた。

白い獣というだけでも目立つのに、その背の荷の多さよ。

呼び止められる度に出入りの許可証を見せ、説明する羽目になった。実に面倒くさい。

献上する動物の上に献上品を載せているので実質全部献上品なんだけど、そもそも宮廷内では見慣れない動物なので気になるのだろう。

手拭きに使っていた布でハクタクの蹄などを拭って、宮殿と後宮とを繋ぐ建物に入れる。

「なんだ、その獣は」

「はああ。会いたくないときに会ってしまったのが嫌みな上司。」

管理者は服の袖で口元を覆っている。く、臭くないもん！ ちゃんと昨日家で洗ったもの！

「こちら、黄妃がご所望のハクタクでございます」

「それが瑞獣だと？」

「一片の穢れさえない白い獣、間違いないでございます。神獣のハクタクでございます」

「……神獣と、言い張るのか？」

「正気か？ みたいな顔をされると、ちよつぱり心が折れそうになる。」

「コホン、書物の一節には『白き獣、神の御使いなりて殺すことなかれ。敬い奉れば慶事となり、嘲り苛めば災事となる』とありますれば、黄妃様が皇帝陛下のために吉兆としてハクタクをご所望というのも得心でございます」

「おや？ その書物の一節、博識と名高い管理者が知らないと？ なんて表情を作ってちらつと見ると、管理者は眉間に皺を寄せている。」

「出典は」

「『甲州神事奉納図録』にございますれば」

「ふつふつ。本屋で確認した図録の名前を述べると、管理者はますます眉間の皺を深める。ごく一部地域の貴重書すぎて宮殿の書庫にもないのだろう。」

「……それで、その白い獣を後宮で飼うのか」

「はい、大変貴重な神獣でございますから、黄妃宮の近くに厩舎と世話ができる者の配備をよろしくお願いしますね」

「にこつと笑いかけると、管理者は苦虫を噛み潰したような顔になる。」

「双方ともにこの白い獣が瑞獣でないことはわかっている。」

「だが、『黄妃が皇帝のためにハクタクを所望した』——そう言い張るのであれば、後宮の管理者は否とは言えない。」

「たとえ可愛がっていた愛玩動物にもう一度会いたいというささやかな黄妃の願いだったとしても、大義名分が整えば、まかり通る。」

「管理者は口元を押さえたまま側近に指示を出していた。」

……ちゃんと洗ったから臭くないもの。



後宮へ入る許可が下り、ハクタクを伴って黄妃宮に向かう。

通りすぎる女官や宦官かんかんに振り向かれながら奥へ進むと、黄妃宮の女官がおやつという顔で出迎えてくれた。

「まあ、その獣はハクではありませんか？」

「どうやら黄妃の生家から付いてきた女官のようだ。

瑞獣ずいじゅうを黄妃様がご所望でしたので」

「あら、そうなのですか!？」背中の荷も姫様宛でしょうか。すぐ姫様にお伝えしてきますね」

他の女官も集まってきて、ハクタクの背に載せられていた荷を下ろして検品を始める。普段は面会を求めても事前に文を飛ばしていなければ待たされることが多いというのに、今日はすぐに面通りが叶った。

「調達人、早かったな」

「黄妃様におかれましても、ご機嫌うらわ麗しゆうございます」

「前置きはいい。それで、妾わらわの望むハクタクが手に入ったのか」

直接言葉を交わす許可が得られたとして面おもてを上げる。

「こちら甲州に起きまして白き瑞獣ずいじゅう、ハクタクを調達して参りました」

黄妃は目元を潤うるませ、懐かしい友人を見ような瞳でハクタクを見つめている。

「ハクタク？ 妾わらわのハクタクか？」

その呼びかけにハクタクが応える。

その鳴き声を聞くと、黄妃は衣が汚れることも厭いとわずにハクタクの首に抱きついた。

「ああ、この鳴き声、間違いなく妾わらわのハクタクだ！」

「はい、白き瑞獣ずいじゅうについて黄妃様のご生家になにか伝承でも残されていないか伺ったところ、黄妃様のご要望通りのハクタクを得ることが叶いまして。他にも黄妃様への献上品を預かってきた次第にございます」

分厚い手紙を渡すと、その字に見覚えがあったのだろう、黄妃はとても懐かしそうな目をした。

「それで、このハクタクは調達人のお前わらわが妾わらわのために探し出してきたものと通せば、後宮で飼うことが可能なのだな？」

「はい。このハクタクは、黄妃様が皇帝陛下のご統治が栄えあるものになるようにと探し求めていた吉兆の証。大切に後宮で飼育するように手筈を整えてあります」

「皇帝の統治……？ いや、妾はそのような意図では……あつ！なるほど、確かにそのような名目があれば、なにも言われることはないな」

「ええ、黄妃様がハクタクと名付けられたのも、その伝承を引用なされたのも、すべて善きほうへ進みました」

そう、正式な許可を得て後宮に持ち込まれたのだ。苦情を言ってくる相手もいまい。

「見事だ、調達人。妾はどの伝承の中にいる瑞獣ずいじゆうでもなく、妾によく懐き、妾の言葉を理解して寄り添ってくれるこのハクタクが欲しかったのだ。入内しゅないの際は、認可わらわされていない獣は連れていくことができないため泣く泣く諦めたのだが、お前はきちんと妾が必要としているこの子を連れてきてくれた」

黄妃はハクタクの毛並みを撫でながら、少しだけ悪戯いたづらめいた瞳で私に問うた。

「して、白き獣は妾の家ではたくさん集められておる。どうしてこの子が妾の愛するハクタクだとわかったのだ？」

その問いに、私はにこりと微笑む。

「なに、簡単なことでございます。黄妃様は依頼の際におっしゃったではありません

んか」

生家に白色の動物がたくさんいる中で、どうしてこの一頭が黄妃の求めたハクタクだと確信が持てたのか。

それは確かに提示されていたのだ。

「黄妃様、もう一度、ハクタクをお呼びくださいませ」

「……ハクタクや」

「ぶべえええ」

なんとも気の抜けるというか、特徴的な返事をする白い牛。

「他にも白い獣はおりましたが、このハクタクのように……なんと言いますか、人間くさい返事をする動物はおりませんんで……」

「ぶべええええ」

こう、おっさんがくしゃみをする前の溜め、のような返事というか。最初聞いたときには少々驚いてしまった。

「白沢はくたけは白き毛並みに額に第三の目、牛に近い存在で人の言葉を解する知性を持つと言います。まさしくこの子は呼びかければすぐに応え、人の言葉を理解する頭のよさもある。幼少の頃に付いたものだと思うのですが、額にも一本傷がありますね。それでこの

子が黄妃様のおっしゃっていったハクタクではないかと思ひまして」

「うむ。まさにそうなのじゃ。子牛の頃に家で保護したのじゃが、この牛ならぬ鳴き声のせいで他の牛からいじめられておつてな。妾が手ずから餌をやり、寝床を整え、可愛がっておつたのじゃ。父上に見つかり姫がすることではないと叱られてしまうことも度々あったが、妾は繊細な刺繍を入れられた衣より、綺麗な石で飾られた装飾より、こうやってハクタクや他の白い生きものを世話していたほうが何倍も楽しかったのな……」

黄妃は、後宮で得られる地位や権力にはあまり興味がないようだった。

「さすがは甲州のお生まれでございます。甲州を治める黄妃様のご生家では、長年にわたり白色の動物を保護していらつしやるとのことでした。女中の話によりますと、お父上様も世話をするのがお好きだったとのことですね」

「なんと……父上も好きならば、妾が世話をするのを止めなくてもいいのに。父上だけでするいぞ」

「黄妃様は後宮への入内を望まれた尊きお方ですので。きつと似たところを嬉しく思いながらもお止めしなければならなかったのでしょうか」

「むう。まあ、快くハクタクを送つてくれたのでよしとするか。調達人、見事であった。

よくぞ妾の望むハクタクを届けてくれた。お前を通して得たのならば、規則破りにもなるまい。褒美をとらせるぞ！」

ハクタクも主に久しぶりに会えたのが嬉しいのか、ぶべえぶべえと喜んでゐる。

「は、ありがたき幸せでございます。ただ、私はハクタクについてご生家を訪ね、譲つていただいただけでございます。旅費などの諸経費は後宮から出るものでございますので、そのお言葉だけで大変光栄でございます」

「ふむ、そうか？ お前は手間を惜しまずハクタクや実家の荷を送り届けてくれたではないか」

「個人的な土産についても過分にいたしておりますので」

「それでは気がすまぬ」

「黄妃様、でしたらひとつお頼みごとがございます」

「おお、なんでもいいぞ」

「こちら、さる妃様から黄妃様への贈りものでございます。こちらの書物と装飾品をお受け取りいただけますでしょうか」

「書物……後宮に来たときに渡された指南書もまだ読み終えていないのに……どの妃に礼を伝えればいいだろうか」

お付きの女官は装飾品に顔を綻ほころばせたが、黄妃はそちらにはあまり興味がないのか、差し出された指南書に眉をひそめる。

「後宮内にて公平であることを望まれる尊き方です。礼は不要と名乗りをあげられませんが、近日なにかの折……宴うたげの席などで作法や装飾品の披露をしていただければ大変お慶よろこびになるのではないかと思います」

「だが気が重い。妾わらわは後宮での作法もままならないのに……」

「でしたら、後宮に長くいらっしやる方で、作法に大変詳しい妃様……たとえば朱妃様をお頼りになられたらいいかと」

「朱妃……入内しゅべいの際に一度お会いしたが、非常に厳しそうなたったな……。なるほど、公平で作法に厳しい方、調達人との取引も多いのだな？」

「はい、度々依頼を承っております」

「ここではまだいずれの妃とも交流を持っていなかったからな。いい機会だろう」

黄妃は指南書と装飾品を誰が寄越したのか理解しようだ。

黄妃の望みを叶え、朱妃からの依頼の品を渡すだけではなく、黄妃と朱妃の繋ぎを作った。今回の依頼は成功といえるだろう。

「実に見事だ。調達人、名はなんと」

「はっ紅姑娘ホンクワンニャンと申します」

「紅姑娘ホンクワンニャンだな、しかと覚えたぞ。それにしても……」

黄妃は私のことをじっと見つめ、感心したように宣のたまった。

「お前のように小さな童わらわが調達人として働くとは。最初は御用聞きだけかと思っていたが、実に立派な童わらわじゃな！」

黄妃はにこにここと笑い、どれ茶菓子に出した月餅げいべいをもっと食べるといい、大きくおなり、と勧めてくれるのだが。

この背丈と童顔のせいで皆誤解するが……すでに成人しているのだ。

皆お菓子だの練り餡あんめだのをくれるが、これ以上は上に伸びずに横に膨らむ。

噂話を集めるには子どものふりが都合がいいこともあるのだが、舐なめられることも見くびられることも……下手すれば迷子扱いで役所に届けられそうになることもある……

私は成人しているのよ……

無垢むくな厚意に水を差すこともできず、半笑いで月餅げいべいを受け取った。

幕間一 紅炎よ、赤く色づき鬼燈を灯せ

とてとてと後宮へ続く道を歩いていく。

前の依頼から数日が経った今日、御用何いのために朱妃のもとへ向かう。

先に通達があったのか、朱妃宮に行くときすぐに通された。

深く拝礼すると、朱妃が面を上げよと伝えてくる。

今回は馴染みの女官がお茶を淹れてくれた。客用のいい茶。どうやら新しい女官はまだ入っていないらしい。

「紅姑娘よ、この前はよき計らいをしてくれた」

「おや？ 朱妃の衣はいつもの朱のものではなく、白系の落ち着いた色だ。」

「ああ、これは黄妃が後宮の作法の教授の礼として、私にくれたものだ」

確かにその衣は、この前黄妃の生家が彼女に贈った絹織物から作られているようだ。

「すべてつづがなく終わったのでしたら、なによりでございます」

「黄妃は誠に聡い娘だ。一を語れば十を知る。それで、彼女からそなたへの礼をいかが

すればいいかと相談されてな」

「礼、ですか？」

この前はよき土産などをいただいてしまったし、必要経費は管理者からしつかりもぎ取っている。

「金子に関してはおあまり意味をなさないだろう。それよりもそなたの望むものを伝える

と、黄妃は快諾したな」

「朱妃様、なにをお伝えなさったのでしょうか」

「妃からの推薦状、といえはわかるだろうか？」

美しい朱を引いた唇が弧を描く。推薦状……それも後宮の妃からのもの。

「もしかして、籠の許可のための推薦状でございますか!？」

「ああ、そなたの鈍足では徒歩は険しかろう。後宮に籠を持ち込めぬが、広い宮殿の中を進むには便利だろう。そう黄妃に伝えると、早速推薦状を書き記しておったぞ」

そうして朱妃の後ろに控えていた女官が黄妃直筆の推薦状を渡してくれる。

やったー！ あと一人分の推薦状で籠が雇える！

「朱妃様、ありがとうございます。黄妃様にも深く御礼を申し上げます」

深々と心からお辞儀した。